菊　の　花　【高学年３－（１）】

－　視聴覚機器を活用した取組み　－

（１）主題名　自然のすばらしさ　〔３－（１）〕　　関連項目　〔３－（２）〕

（２）ねらい　自然のすばらしさを知り，自然を大切にしようとする心情を育てる。

（３）資料名　「菊の花」

（４）授業の展開例

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留　意　点
導入	１　植物を育てた経験を出し合う。	○植物を育てて，上手に花が咲いたり，実がなったりしたことがありましたか。	○今まで自分たちが育ててきた植物の写真を掲示し，そのときの気持ちを思い起こしやすくする。
展開	２　資料を読み，よしえや健一の行動から気持ちを考える。 ３　今までの自分の生活を振り返る。	○だめかも知れないのに，肥料をやったり世話をし続けたりしたよしえと健一の気持ちを考えてみましょう。 ・折れた菊が心配でたまらない。 ・菊の命を生かしてやりたい。 ・鉢を落とし守りきれなくて悪かった。 ◎「新しい芽が出ているよ」とさけんだとき，どんな気持ちだったのでしょう。 ・よかった。 ・すごい。生きていたんだ。 ・菊もがんばっていたんだ。 ○この菊の話のように，自然をすばらしいなと思ったことはありませんか。	○台風の時の二人の行動や，これまで植物の世話をしてきた経験からも考えさせる。 ○うれしいという気持ちだけでなく，植物の力や生きようとするエネルギーを感じ取れるように，補助発問をしていく。 ○身近にある自然に目を向けるよう言葉をかける。
終末	４　教師の話を聞く。	○高山植物チングルマのお話をします。 「１ふみ１０年」と言われていること，自然を守るのは私たちだという自覚を持つこと，その気持ちは日常から始まることを含んだ話。	○チングルマの写真を掲示し，雰囲気を伝える。

菊（きく）の花

「菊は、だいじょうぶかな？」
はげしく雨がふってきました。台風がやってきているようです。よしえと健一は、学校で育てている菊のことが心配になってきました。
春にさし木をし、五センチぐらいに育った菊をはちに植えかえました。毎日水やりをしてきた菊が、こしの高さまで大きくなっています。もう少しでつぼみがつきます。そんなときに風でたおれてしまっては、今までの苦労が水のあわになります。

「学校へ行ってみよう。」
二人は雨の中を走って行きました。すると、はちのそばにだれかいます。校長先生でした。二人は、校長先生といっしょに、はちを風の当たらない校しゃの中にうつしました。

大きなはちは、一人で持つと重くて、運ぶのに時間がかかります。一つ一つ動かすしか方法がありません。学年の人数分あるはちを動かし続けて、どのくらい時間がたったのでしょう。あともう少しと思ったとき、手がすべってしまいました。あっという間に、はちがころがって、菊のくきが折れてしまいました。よしえも健一も、いっしょうけんめい菊を守ろうと思ってやったことなのに、折れてしまったのです。
（どうしよう。）
と思っていると、校長先生がそえ木をしてくださいました。

次の日、さいわい台風のひ害は少なく、みんなの菊はぶじでした。たんにんの田中先生は、
「よく気がついて、みんなの菊を守ってくれたね。おかげで大切な菊の命が守られたよ。」
と言ってほめてくださいました。でもよしえと健一は、ただ一つだけ折れてしまった菊が心配で心から喜べませんでした。
「もう、だめなんじゃない？」
「この菊は、花がさかないよ。死んじゃったみたいだ。」
よしえと健一は、そう言いながらも、やっぱり毎日水をやったり、ひ料をやったりと世話を続けていきました。
ほかの菊がどんどん大きくなり、つぼみをつける中、そえ木をした菊だけは、みすぼらしく見えます。
（守ってあげられなくてごめんね。）
という思いと、運ぶのにくたびれていたけれど、一つ一つていねいにあつかえばよかったと、こうかいばかりです。
そんなある日、いつものように菊の世話をしていたよしえと健一は、今までになかったものを発見しました。折れたくきのそばに、小さな小さな芽が出ていました。それが、生まれたばかりの赤ちゃんのように、伸びようとしているのです。
「新しい芽が出ているよ。」
と、二人は、思わずさけんでしまいました。

よしえと健一は、新しい芽を出し、がんばりはじめている菊が、とてもすがすがしいものに感じました。今もさわやかな日差しを浴びながら、その菊はすくすくと大きくなっています。

活用に生かすための実践報告

◎「菊の花」

1　主題の設定

自然と人間のかかわりは，何気ない普段の日常生活の中に数多くある。特別に山や海・川に行かなくても，家の周りや町の中に，自然を感じる光景はたくさんある。そして，自然から，人間は多くの恵みや憩いなど目に見えない恩恵を授かっている。

そこで，子どもたちが，意識せずに享受している自然のすばらしさを感じ直したり，自分たちが行っている栽培活動も自然を大切にしていく行為につながることを考え直したりする機会になるよう，本資料を作成した。自然を守る・自然とかかわる行為は，努力や根気のいるものである。そして，それを支えるのは，生命を愛しく思う心や自然のすばらしさを感受する心である。自分たちもそのような心を持っていることに気付き，自分たちのできる範囲で，自然とかかわっていきたいという気持ちをはぐくみたい。

2　指導過程の工夫

導入で，今まで自分たちが育ててきた植物の写真や観察記録の絵を提示する。その時の自分の気持ちと重ね合わせながら，よしえや健一の気持ちを考えやすいようにした。

また，終末でも，視聴覚機器を使い，視覚的に理解することができるように工夫した。

3　発問の工夫

「新しい芽が出ているよ。」とさけんだときの気持ちを中心発問で問う。このとき，二通りの発言が考えられる。一つ目は，植物の再生力・生きる力のすごさに感動した気持ち，二つ目は，あきらめずに毎日毎日世話をしてきた行為の結果に対する喜びの気持ちである。そのため，「努力が報われたという行為の結果としてうれしい」という気持ちだけでなく，植物の生きようとする力や内在するエネルギーなども感じ取れるよう，補助発問をしていく。

4　児童の反応

（今までの自分を振り返ったときの発言）

・花を育ててもなかなか芽が出ないから心配していたら，一気にたくさん出てきてとってもうれしかった。
・妹のホウセンカが，すごくしおれていたけれど，水をあげたらうそみたいに生き返りびっくりした。
・ヒヤシンスを育てたとき，みんなのはさいたのに，ぼくのだけさかなくて心配したことがある。いつものように世話をしていたら，花がさいてとってもうれしかった。
・朝顔を育てたとき，朝顔のつるがグングン，グングンのびていったので「植物ってすごい。」と思った。
・家で小さな木を育てていて，葉がいっぱい落ちてかれると思ったけれど，また元気に成長を始めたときはおどろいた。

5　実践者からの一言

視聴覚機器を活用することが，この実践では有効であった。

主人公と同じ感動を追体験した後で，今までの自分を振り返ると，意識していなかった自然のすばらしさや自然から受ける恩恵を感じ直すことができた。

関連させて，総合的な学習の時間や特別活動（学校行事）などで実践し，気持ちを高めていきたい。

（古市小学校　藤本嘉江）